



(公財) 国際宗教研究所 宗教情報リサーチセンター

20周年記念誌・国外

→デジタル版公開ページ <http://www.rirc.or.jp/20th/20th.html>

*印刷してご利用の際は2頁目以降を印刷して下さい。

妙智會教団「ありがとうインターナショナル」 の国際的展開

李和珍

はじめに

妙智會教団（以下、妙智會と表記）は、霊友会から分派して1950年10月12日に代々木に本部を開教した。法華經による先祖供養の実践を根本教理としており、仏教系の新宗教教団である。創始者の宮本ミツ（1900～1984、没後は会主と呼ばれる）の指導のもと会員を増やし、後継者となった娘婿の宮本丈靖（1917～2015、没後は大導師と呼ばれる）会長が2015年まで会を指導した。丈靖の没後息子の宮本恵司法嗣が教団の運営・活動を継承している。ミツと夫の宮本孝平（1891～1945、大恩師と呼ばれる）の生まれ故郷である九十九里町には千葉聖地がある。全国に信者は広がっており、山形・秋田・新潟・群馬・山梨・名古屋・九州の各教会と、福島県に小名浜道場、その他500以上の支部がある。妙智會の公称会員数は、『宗教年鑑』（平成30年版）によると689,808名である。霊友会系教団であるため、霊友会の教えと重なるところがあるが、中心的な教えは「先祖供養」、「忍善」、「懺悔」、「感謝」である。

妙智會は開教当初から社会奉仕活動を行ってきた。1959年から始まった赤い羽共同募金と、自然災害地への協力や援助金寄付などは現在まで続いている。また聖地のある九十九里町に対しては文化教育・振興資金などを寄付している。初めての国外への援助活動は、1985年にアフリカに毛布を送る運動である。88年には新日本宗教団体連合会（新宗連）主催のカンボジア難民への援助をした。開教40周年を迎えた1990年10月13日に、国際平和活動の推進を発表し、「ありがとう基金」を設立した。これは世界の子供のためのより良い環境づくりを通して、世界平和に貢献するという目標をもつものである。その際、10月12日を「世界の子どものために祈る日」とした。2003年2月には国連経済社会理事会の特殊協議資格を取得して国連NGOに認定された。「ありがとう基金」は「ありがとうインターナショナル」と改称されるが、本稿では、その21世紀における活動の特徴について述べる。

1. 「ありがとうインターナショナル」の組織と方針

妙智會の「ありがとう基金」は2012年12月25日に一般財団法人ありがとうインターナショナルと名称を改め、翌年4月1日から財団法人としての本格的な活動を始めた。財団の本部は、東京都代々木の教団本部にあった「ありがとう基金事務局」が、そのまま「ありがとうインターナショナル事務局」となった。宮本恵司法嗣が総裁を務め、1人の監事と以下の4人の理事で役員が構成された。すなわち妙智會教団理事長の齋藤賢一郎、浄土宗見樹院・寿光院住職の大河内秀人、玉光神社権宮司の本山一博、大阪大学大学院教授の稲場圭信である。これで分かるように、理事には宗教団体の関係者に加え宗教学者も含まれている。2014年6月28日には金光教泉尾教会教会長の三宅光雄が新理事として加わり理事は5人となった。スイスのジュネーブ（2003年2月開設、常駐4人）、アメリカのニューヨーク（2009年7月、常駐2人）、ケニアのナイロビ（2013年8月、常駐7人）にそれぞれ海外事務所が開設され、連携をとりながら活動を実施している。

1997年1月には、ありがとう基金事務局が設立されたのであるが、そのおりにありがとう基金の活動の広報紙として、『ありがとう基金だより』が創刊された。以後2000年までは不定期的に発行されたが、2001年1月から『ありがとう基金NEWS』（A4サイズ1ページ）に名称を変えてからはほぼ毎月発行され、2012年まではこの名で継続された。

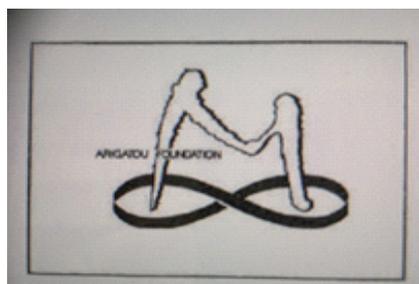
一般財団法人ありがとうインターナショナルになってから、『ありがとうnews』（A4サイズ8ページ）と名称を変え、季刊紙として刊行されるようになった。月刊紙から季刊紙になったが、活動の内容はより詳細に掲載されるようになった。ここに掲載された記事を参照すると、ありがとうインターナショナルの1年間の予算額は2億5千万円となっている。支出の内訳も公開されている。一般財団法人になってから、寄付金の送金先が1つから3つに増えているが、口座名は「妙智會ありがとう基金」のままであることが分かる。寄付金はほとんど妙智會会員からのものであると推測される。90年代の『ありがとう基金だより』を参照すると、会員に貯金箱で「ありがとう基金」の輪を広げようというお知らせがある。2015年の季刊紙には「浄財の納め方」も紹介されている（『ありがとうnews』2015秋冬号vol.9）¹⁾。また、参与調査の際にも妙智會会員は

会費と喜捨以外に「ありがとう基金」と題した別の布施修行をしていることが観察された。非会員からの寄付金については、2000年からはありがとう基金主催のチャリティーコンサートや全国にわたって各支部がチャリティーバザーを開催して募金活動をしている。

2001年1月号に掲載されたありがとう基金のロゴマークは下図のとおりであるが、ARIGATOU FOUNDATIONの文字が見える。2008年11月No.86号からはありがとうインターナショナルの新しいロゴが使われるようになったが、これは宮本ミツが最後に残した言葉である「心」という漢字をもとに宮本恵司総裁がデザインしたものである。その意味は子どもに対する平等と普遍的な慈しみと宗教者の連帯を表現しているという。2015年からは「All for Children」(すべては子どもたちのために)の一文がつけ加えられ、新ロゴマークとして使用されている(2015年春号vol.7)。このようなスローガンからも分かるように子どものための活動であることを全面に出していることがわかる。

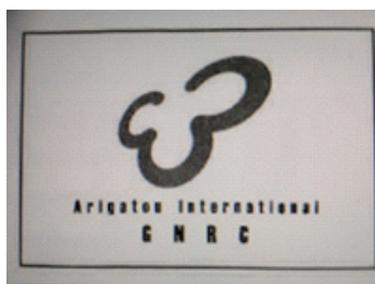
ありがとうインターナショナルは、妙智會の社会支援活動を継承しながら、国際平和活動として「宗教協力」、「倫理教育の推進」、「子どもの権利」、「貧困撲滅」という4つの方針に従って事業と活動を展開している。活動の詳細については次章で述べるが、「ありがとうインターナショナル」の公式ホームページ(<https://arigatouinternational.org/jp/>)でその内容が閲覧できる。ホームページは2018年10月現在、日本語、英語、フランス語、スペイン語で作成されている。

ありがとう基金のロゴ



2001年から

ありがとうインターナショナルのロゴ



2008年から

ありがとうインターナショナルのロゴ（2015年から）



2. 「ありがとうインターナショナル」の活動とネットワーク

妙智會は、1953年から新日本宗教団体連合会（新宗連）に加盟しており、国内の宗教協力や社会活動を積極的に行ってきた。70年からは世界宗教者平和会議（WCRP）との関わりでアジア宗教者平和会議（ACRP）に参加するなど、次第に国際機関とのつながりも増えていた。ありがとうインターナショナルの主な活動は5つにまとめられるが、それぞれの活動はどのようなネットワークで継続できているのかを探る。

(1) 社会への支援・援助の活動

妙智會会員による募金活動で集まった寄付金は、ユニセフ（国連児童基金）、日本ユニセフ協会、日本赤十字社、国連 UNHC 協会などを通して寄付されている。主な寄付の内容は、自然災害に対する義援金と子どものための環境づくり、教育プロジェクト、物資支援、諸宗教関連施設の建設などである。支援金の寄付方法は、主にユニセフを通して行っている。

妙智會は、1990年3月に行われた宮本ミツの7回法要の際に宮本丈靖が示

した「国際社会活動」の方針によって、同年7月から教団本部でユニセフ学習会や勉強会を実施し、援助活動の計画を立てる。国際社会に対応する教団の姿を改めて学び、アジアでも最貧困の国であるネパールとバングラデシュが、海外からの援助を強く求める国として認識されるようになった²⁾。ありがとう基金が同年10月に設立されてすぐの11月に、ネパールとバングラデシュの給水と衛星事業に対する支援を開始している。両国には井戸やトイレの建設や学校での衛生教育を実施し、95年には不衛生な爪を噛むことで病気になる子どもたちを救うために、バングラデシュの小学校に4万個の爪切りを配布した。99年3月にはネパールのサラヤンタン村に小学校の建設をし、竣工式を挙げる。ネパールとバングラデシュへの支援の目標達成が近づいてきたと同時に、98年10月からはブータン、ペルー、モザンビーク、ヨルダンへの支援も開始している。

2006年から3年計画でタジキスタン女子教育事業支援金を日本ユニセフ協会へ寄託する。また、妙智會の婦人部が中心になって行っている支援としては、公益社団法人シャンティ国際ボランティア(SVA)が展開している事業「アジア子ども奨学金」を援助している。2011年より日本ユニセフ協会を通して「イエメンの子どもたちの出生向上および児童婚の防止プロジェクト」へ支援を続けている。国連UNHC協会の「難民の子どもたちへの教育支援プロジェクト」への支援も行っている。2014年12月6日にはインドのコシンビにある孤児や障がい児を世話する施設シーバン・ヴィスカ・セバ・トラストの敷地に「諸宗教対話センター」を建設した³⁾。

2014年国連統計の最貧国に関する報告書を見ると、アジアからは、アフガニスタン、バングラデシュ、ブータン、カンボジア、ラオス、ミャンマー、ネパール、東ティモール、イエメンの9ヶ国がリストアップされている。この統計からも分かるように、妙智會はアジアの最貧国であるネパールとバングラデシュを対象に支援活動を行ったことが分かる。

(2) 宗教協力のために始まった活動

2000年には「子どものための宗教者ネットワーク(GNRC: Global Network of Religions for Children) 以下GNRCに表記」(公式サイト <https://gnrc.net/en/>)が発足した。この構想は1997年5月の「宮本丈靖の傘寿のお祝い」の席

上で発表された。GNRCは世界各地で子どものための活動を行っている宗教者間の連携・協力を通して、宗教者の立場から子どものより良い環境をつくることをめざす諸宗教ネットワークである。

2000年5月16～18日に第1回フォーラムが東京で開催された。テーマは『祈りと行動—子どもの未来のために』であり、34ヶ国293人が参加した。同年7月には妙智會の千葉聖地で「子どもの未来会議」が開催された。以下、2017年までのフォーラムの開催地、テーマ、参加者は次の通りである。

・第2回フォーラム

2004年5月17～19日、スイスのジュネーブで開催。テーマは『子どもとの約束』で、68ヶ国359人が参加。

・第3回フォーラム

2008年5月24～26日、広島で開催。テーマは『共に生きることを学ぶ—倫理と実践、新たな希望』で、63ヶ国353人が参加。

・第4回フォーラム

2012年6月16～18日にタンザニアのダルエスサラームで開催。テーマは『貧困をなくし、子どもたちを豊かにする—啓発、行動、変革』で、64ヶ国350人が参加。

・第5回フォーラム

2017年パナマ共和国パナマシティで開催。テーマは『子どもに対する暴力をなくす—行動する宗教コミュニティー』で、70ヶ国519人が参加。

このように、4回までは4年ごとにフォーラムが開催されていたが、2014年3月4日の理事会で5年おきの開催となることが決定されたので、第5回目のフォーラムは2017年の開催となった。

GNRCは子どもの権利と福祉に取り組んでいる宗教指導者のグループ、子どものために活動を行う宗教団体、NGO、教育者、ユニセフやユネスコ等の国連機関などが参加している。第3回フォーラムにミギ国連副事務総長の出席が決まった際に、ありがとう基金のようなNGOが主催するフォーラムに参加するのは異例なことだとし、ありがとう基金が国際社会で高い評価を受けている証だ

と評価している⁴⁾。GNRCのネットワークをみると国、人種、宗教を超えて連携・協力をしていることが分かる。GNRCの公式ホームページは英語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、アラビア語で閲覧できる (<https://gnrc.net/en/>)。

(3) 倫理教育の推進

「倫理教育の推進 (Interfaith Council on Ethics Education for Children)」のために「倫理教育委員会」が2004年に設置された。これに先立つ2002年5月8日～10日に、ジュネーブで開かれた「国連子ども特別総会」にてGNRCを代表して当時宮本丈靖会長が演説し、子どもたちの道徳心や信仰心、尊敬心を育む「倫理教育委員会」の設立を約束し、GNRCの第2回フォーラムの際に設立が発表された。ジュネーブには、国連ヨーロッパ本部や国際赤十字委員会をはじめ、約200以上もの国際機関が集まっている都市でもあり、2003年に「倫理教育の推進」を担当するジュネーブ事務所が開設された。公式サイト (<https://ethicseducationforchildren.org/en/>) は英語、フランス語、スペイン語で閲覧できる。

2005年5月に第1回の倫理教育委員会『倫理教育と人類の未来—今なぜ倫理教育が必要とされているのか』が東京の国連大学で開催され、国内外から320人が参加した(企画協力:国際宗教研究所、後援:ユニセフ)⁵⁾。倫理教育に関するワークショップや公開シンポジウムは日本国内を含め、世界各国(スウェーデン、スイス、ポルトガルなど)で実施されている。そのワークショップで使われている教材が、諸宗教の倫理教育を行うための具体的なリソースとして開発されたのが、『共に生きることを学ぶ(LTLT: Learning to Live Together): 倫理教育のための異文化間・諸宗教プログラム』である。

2008年に国連教育科学文化機関(ユネスコ)とユニセフの協力・推薦で完成した同プログラムは、11言語に翻訳され、世界30ヶ国に約3千冊配布、教材の指導者養成、子どもたちへのワークショップで使われている。妙智會では青年部の聖地団参でのワークショップやWCRPサマーキャンプで使われた。このプログラムを用いてワークショップを行った青年部の一人は「ワークショップを通して妙智會の会員が参加して世界の人と交流することで、世界の宗教や子どもたちの現状を学び、宗教や言葉や価値観が違ってても嫌ったり争うのでは

なく、相手の意見を尊重し、受け入れようとする心を持つことで、人と人の心はつながり、それが世界平和に向けての第一歩になることを学んだ。」と感想を述べている⁶⁾。

(4) 子どものための祈りと行動

子どもの権利条約の実施を推進するために、「子どものための祈りと行動の日 (DPAC : Day of Prayer and Action for Children) 以下 DPAC に表記」(公式サイト <https://prayerandactionforchildren.org/> 英語) が 2009 年に発足した。先に述べた 2008 年の GNRC 第 3 回フォーラムの際に、「世界の子どもの日」と「子どもの権利条約」の記念日に合わせて毎年 11 月 20 日を「子どものための祈りと行動の日」として定めた。祈りと行動を通して子どもたちの幸せと権利を促進し、さまざまな宗教者と善意のある人々を結集することを目標とする活動である。2009 年～2012 年まで世界 80 ヶ国において延べ 300 以上のイベントが行われた。DPAC の活動は 2009 年 7 月にアメリカ・ニューヨークに開設された事務所が担当している。

2013 年 5 月にはインド・コインバトールで DPAC 委員会と関連イベントが開催された。子どものためのパブリックデディケーションと題して子どもたちへの一層の献身を誓うセレモニーが近隣の大学施設で行われ、約 500 名の子どもや若者が集まり、シャンティ・アシュラムでの活動について発表した。子どものための祈りと行動の促進をテーマにインドの宗教界や、活動する団体の代表者が集まって円卓会議も開かれた⁷⁾。

日本でも DPAC 記念シンポジウムが開かれた。国際文化会館で 2014 年 11 月 21 日に開かれたシンポジウムのテーマは「インターネットに潜む危険から子どもたちを守るためには」⁸⁾ である。日本ユニセフの後援と、宗教界、子どものための活動を行う関係者など、総勢 109 名が参加した。シンポジウムのコーディネーターは理事の稲場圭信教授、パネルディスカッションのパネリストは、理事の大河内秀人(浄土宗見樹院・寿光院住職)、日本基督教協議会、国学院大学神道文化学科准教授、日本ユニセフ協会広報室、セーブ・ザ・チルトレン・ジャパンのメンバーから構成されていた。

(5) 子どもの貧困をなくすための活動

「子どもの貧困をなくす (Together we can end child poverty worldwide)」諸宗教イニシアチブ活動も行われている。2012年のGNRCの第4回フォーラムの際に貧困問題に取り組むと打ち出した。翌2013年8月1日に開設したナイロビ事務所では貧困撲滅のための活動とともに、世界の各地域におけるGNRCネットワークを支える事務所も兼ねている。常駐職員も7人で他の事務所より多く、力を入れていることが分かる。

2013年8月19～20日にケニアのナイロビ市内で「貧困暫定運営委員会」が行われ、当イニシアチブが目指す目的のために次ぎの3つの点を合意した。

①貧困の精神的な根本原因(欲、無知、憎悪、恐れ)を内省と行動によって軽減すること。②諸宗教間のアドボカシーを通して貧困の構造的原因に立ち向かうこと。③持続可能な草の根活動によって子どもの貧困と闘うこと⁹⁾。2014年5月には子ども兵士に関する円卓会議、6月にはアフリカ諸宗教リーダーによりサミット共同開催、スリランカ・コロンボでは10月13日から一週間は貧困撲滅に関する会議が開かれた。同国の西部都市のモラトゥワでは「貧困撲滅活動のための国際デー」にあたる10月17日に「貧困撲滅のための情報センター」の開所式も行われた。当センターは、現地のNGO団体であるサルボダヤ運動によって運営され、貧困撲滅に取り組む活動の情報を収集し、関係団体と共有し、お互いの学びの場を提供している¹⁰⁾。

以上の主な5つの活動を推進するために、各種の啓発・広報事業も行っている。インターネットによる情報提供、マスコミ関係者との情報交換、記者懇談会、プレスリリースの発行、機関紙の発行などである。妙智會の教団ホームページより、ありがとうインターナショナルのホームページの方が、内容が充実しているのが分かるが、これは妙智會が、社会活動としては、ありがとうインターナショナルの活動をきわめて重視していることのアラわれと理解できる。ホームページでの発信は英語が中心であり、どちらかと言えばアジアよりは、欧米社会を意識しているとも言える。

3. 「ありがとうインターナショナル」の活動への国内外の機関の評価

ありがとうインターナショナルの国内外の活動に対する国内外からの評価に

ついて見てみる。妙智會の機関紙「妙智會」と宗教専門紙「新宗教新聞」「中外日報」「佛教タイムス」などには、ありがとうインターナショナルへを表彰する記事などがあるので、いくつか拾い上げてみる。

2001年5月12日、ユニセフのキャロル・ベラミー事務局長から宮本丈靖会長（現・大導師）『感謝の盾』が贈られている。感謝状には、「ユニセフに対する献身的な貢献をたたえここに感謝の意を表します」と書かれている。ユニセフ・上級プログラムオフィサー（宗教NGO担当）のファリダ・アリ氏からお祝いの言葉とともに会長に直接手渡された。「長年にわたる子どもたちへの献身的な貢献に対して贈られるもので、日本人としては初のことであり、とくに世界でも宗教指導者に差し上げるのは、これが初めてのことです」という挨拶が掲載されている（妙智會2001年6月1日、606号）。

2002年6月1日、代々木本部で行われた宮本丈靖会長の85歳誕生祭の式典の際に、宮本会長ヘイタリアの「フィレンチェ市平和賞」が贈呈された。イタリア大使館のグスタヴォ・クトロ文化担当官から賞状と記念の盾を贈呈された。世界の子どものために教団が設立した「ありがとう基金」等の平和活動が称えられた。5月10日に開かれた「国連子ども特別総会」で宗教NGO代表として宮本会長が演説したことの報告も行われた（中外日報2002年6月8日付、13日付）。

2005年5月20日、代々木の明治神宮会館で開催された全国赤十字大会の席上、宮本会長が日本赤十字社名誉総裁の皇后陛下から賞状と「金色有功章」を授与された。妙智會が日本赤十字社に対して長年にわたり、国内外の災害時における緊急義援金などの支援活動を続けてきた功績が高く評価された。（中外日報2005年6月4日付、妙智會2005年7月1日、653号）。

2007年5月14日、宮本丈靖会長の卒寿誕生祭の式典で、ユニセフより「子どものための宗教指導者賞」として、アン・ベネマン事務局長から表彰盾が贈られた。また、パレスチナ政府からは妙智會とありがとう基金の長年の人道支援に対し、「エルサレムの星」勲位が贈られた。この勲位は、パレスチナ国家の最高勲位で、海外へ送られたのは初めて（佛教タイムス2007年5月24日付、新宗教新聞2007年5月25日付、中外日報2007年5月29日付、中外日報2007年6月19日付）。

2018年11月19・20日、アラブ首長国連邦（UAE）の首都アブダビで開かれた「より安全なコミュニティのための諸宗教連合」による最初のフォーラム「デジタル世界における子どもの尊厳」が開かれた。日本からは、子どもに対する支援で国際的な活動が評価されている（一財）ありがとうインターナショナルの母体である妙智會教団の宮本恵司法嗣が招かれた。フォーラムの準備段階から協力してきたありがとうインターナショナルの宮本恵司総裁に「社会奉仕賞」が贈呈された。副首相兼内務大臣でもあるサイフ・ビン・ザード・アール・ナヒヤーン閣下から贈られた（中外日報2019年1月10日・17日合併号、文化時報2018年12月12日付）。

以上の記事内容から分かるように、ありがとうインターナショナルの活動は、その活動について多くの国際機関によって認識され、評価されていることがうかがえる。

むすび

ありがとうインターナショナルは、妙智會が国際的な社会活動を推進していくという明確な目標があって設立されたものである。本文で述べたような活動が、継続的に行われており、海外諸機関とのネットワークは広がっていることが分かる。海外の宗教関連団体のみならず、政府機関、国際協力機関とのつながりを重視している姿勢がうかがえる。妙智會という宗教団体の性格を前面に出すのではなく、未来を担う子どもたちの幸せ、貧困撲滅の願いといった世界的に大きな課題となっていることに焦点を据えている。その意味では、教団の支部を海外に広めるための活動というより、国、人種、宗教を超えての国際協力活動の輪を広げることで、結果的に妙智會という宗教団体の存在意義を世界に知らせるという道を選んだとも解釈できる。

それゆえ海外の人たちからみると、妙智會は宗教団体というよりも国連 NGO 団体として受け止められることが多いと考えられるが、そもそも現代社会においては宗教団体の活動とそうでない組織の活動の境界線は曖昧になってきている。その意味では、いわゆる「二重のボーダレス化」現象の一つの例としてとらえられるかもしれない。二重のボーダレス化とは、教団、宗派などの活動や宗教習俗などがきわめて容易に国境をこえて広がる側面と、そうした広がり

過程で宗教と宗教でないものとの境界が、以前に増して格段に見えにくくなり入り込んでいる現象を指している¹¹⁾。そのように考えると、ありがとうインターナショナルの活動が、宗教的目的の一環としての社会活動であるのか、それとも本来の宗教教団の目的とは切り離された活動であるのかというような問いかけをする必要がないということになる。

注

- 1) 一つは、毎月供養会のある1日・14日・28日には、本殿地下1階ロビーにありがとうインターナショナルのカウンターが設置されているので、メモや封筒には「支部」と「お名前」を記入して浄財を納める方法。もう一つは振込用紙があるので振り込みでもOKとのことである。「ありがとうインターナショナルへの喜捨は、〇〇円〜という指定はございません。皆様の温かいお心をおまちしています。」と記載されている。
- 2) 会報『妙智會』1990年7月1日、475号、1990年8月1日、476号。
- 3) 当センターは、宮本総裁とカトリックのフェリックス・マチャド大司教（元バチカン諸宗教対話評議会次長）の協議のもとに建設され、地上2階地下1階建てで、会議室の他に50室もの宿泊部屋が建設された。今後、宗教間対話を通じて平和と調和のために、インドのみならずアジアにおける諸宗教対話の促進に有効活用される。「ありがとう news」2015年春号、vol.7 参照。
- 4) 「ありがとう基金 NEWS」2008年3月合併号、No.85 参照。
- 5) 「ありがとう基金 NEWS」2005年5・6月合併号、No.66 参照。
- 6) 「ありがとう news」2013年冬号、vol.2 参照。
- 7) 「ありがとう news」2013年秋号、vol.1 参照。
- 8) ネットいじめや性的摂取、児童ポルノなど、見えにくい暴力の温床となっているネット上の問題の現状と課題を探り、子どもに対する暴力をなくすための具体的な行動のあり方を模索した。「ありがとう news」2015年春号、vol.7 参照。
- 9) 「ありがとう news」2013年冬号、vol.2 参照。
- 10) 「ありがとう news」2014年冬号、vol.6 参照。
- 11) 井上順孝「現代宗教の広がりに見る二重のボーダレス化」『神道宗教』第249号、2018年1月。